芦高新聞

発行所
県立芦屋高等学校
出版部
兵庫県芦屋市宮川町6の3

入学おめでとう

自らの生きる目標をみつけよ

学校長　市橋　勉

合格発表の日、給品部前の柱に「本校には制服・制帽がありません」と白紙に墨書した掲示が目につく。登校して来た新入生は一瞬奇異に感じたでしょう。或いは、県芦に制服のないことが定着していてさして不思議と思わなかったかも知れない。

家族の人々は、高校入学の朝に真新しい白線二条に校章も目映い学帽を被る吾が子の姿、きちんとしたスーツを身に纏って一段と娘らしくなった高校生の吾が子の姿を見ることを夢み、期待しておられたことと思う。

それは、精神的・思想的・人格的に自己を形成すべき青年期の大切な入り口に立つ吾が子の姿をみて安心もし、また励ましもしたい気持だと思う。

高等学校教育の目的は、学校教育法という法律の中に「中学校における教育の成果をさらに発展拡充させ」、「社会において果さなければならない使命の自覚に基き、個性に応じて将来の進路を決定させ」、「社会について広く深い理解と健全な批判力を養い」と示している。この堅苦しい文章のめざしていることを達成するため、県芦教育の基礎を確立した創生期の人々は、その教育活動の綱領に「自律・自治・自由」と謳い、その思想によって三十余年間培われた校風は、服装の自由化を華美な、無秩序なものとしないで、そこにも自律・自治・自由の精神を生きさせている。

しかし、現実の県芦の姿の中には反省すべきところ少なしとしない。「個性に応じた将来の進路」について就職希望者はそれぞれそのところを得ているが、数多い進学希望者についてその進路決定の状況は果して満足できるものであろうかと反省する。この疑問は、決して大学合格者の数字のことを言っているのでない。自己の目標を達成するため自主的な努力が続けられているか。自由ということに甘えて、自律心の大切なことから眼を逸らせ、学問というもののきびしさから逃げていないか、と問うている。

高等学校の教育内容は随分と難かしくなっている。だからと言って、安易な学習でも理解できるように内容を低下させることで事足りるものではない。定期考査で満点をとることに汲々とするよりも、「社会について広く深い理解と健全な批判力を養う」ために、すべての教科についてその中に流れている思想を読みとるための努力を望みたい。

高校生活を出発点として自己の人格をつかみ直し、自己の生きる目標をみつけることができればよい。「社会において果さなければならない」自分の進路をみつけたいものだ。そのことができれば、灰色と言われる受験をめざしての学習活動にも自らの生命の躍動を感じ得るのでないか。自分の一生の仕事として、それが学問であれ、事業であれ、市井の片隅での営みであれ、自分の一生を賭けることの、あるいは献げることのできる仕事を見出したいものである。

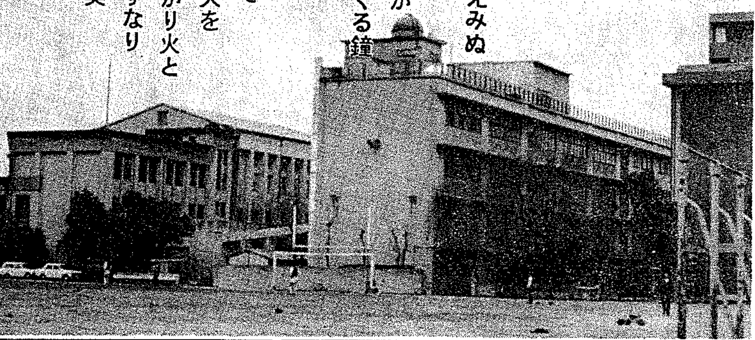
私が旧制中学校を卒業して、教師への道を志し高等師範学校に合格した日、祝いに来てくれた先輩が「いい仕事を選びましたね。人間はその生を終るとき、いい一生だったと思えたら一番幸福だろう」と言われたこと、四十年近く経った今なお、忘れ得ぬ言葉として私の脳裏に焼きついている。

「青春期を失うものは、一生を失う」。青年期の第一歩を踏み出した新入生諸君、生きる目標をみつけるための歩みを続けられよ。

校歌

一
春曙の打出浜
東の空に茜さし
平和の女神ほほえみぬ
翠ケ丘の梅薫る
わが学舎に若人が
つくよ時代を告ぐる鐘

二
夏夕凪の芦屋川
昔の光ほのみえて
書よむ窓訪ふ螢火を
理想を照らすかがり火と
学徒われらは観ずなり
いざ求めん真善美



芦高今昔

教頭　中村　政一

先日芦高五期生の同窓会に招かれ、久々に昔の生徒達に会い時の移るのも忘れて語り合ったことでした。

当時雄弁をもって鳴った文化部長K、第一回記念祭のポスターを書いたN、数学研究部創設時のメンバーO、名三塁手と謳われたT、その他集まった三十余人の誰の顔を見ても、幼な顔の名残は感ぜられるものの、卒業以来二十数年を、それぞれの道で十分に生き抜いて来た体験と、現在の仕事に対する生き甲斐に裏打ちされた、立派な大人の顔になったものよと痛感した次第でした。

彼等が口々に語る芦高時代の、勉学のこと自治会クラブ活動のこと、或いはいたずらの告白や先生の棚卸し、又その後の学問の進展仕事の経緯、将来の抱負から家庭の珍事に至るまで、様々の話題の中から、芦高発足の頃を思い今の芦高を考えて、感じたことの二、三を記してみます。

芦高創業時即ち昭和二十年代の前半数年は、まず極端な物の不足から始りました。昭和二十年六月空襲によって校舎罹災、各所の小学校その他の施設を借用しての分散授業が行われ、昭和二十一年私が新任教員として赴任した時は、現在の市役所付近にあった青年学校の建物で、木造二階建の教室は六教室位、壁は所々破れ風が強い日は二階が少々ゆれるという次第、勿論グランドは無く、式の日は川岸の松林に生徒を集め、校長はその辺の土管の上に立って話をするという有様でした。

昭和二十二年秋、念願の単一校舎を得て全校生が現在の校地に集ったわけですが、当時の芦中新聞に掲げられた某先生の歌に、

「学び舎を得たる朝は
九百の　声もほがらに
堂にこもらふ」

とありました。放浪の旅に漸く終止符をうった喜びを皆でしみじみとかみしめたものです。

さてその単一校舎なるものも建物は現在の本館だけ、運動場はその南側の狭小な部分であり、学校周辺はまだ戦災の名残りも濃く、現在のグランド等は焼け瓦や家の土台、庭石の倒れたものなどが累々として、正に瓦礫の中に立つと言う感じでした。教材教具も今にして思えば無に等しい状態の中ですから、勉強にも運動にも随分と不自由なことでした。例えば教室数が足りないところから講堂に板仕切りをして仮設四教室を作って授業を始めたわけですが、何分薄い板仕切りのこととて四人の先生の声が他の教室に聞え、とうとう生徒から四科目の講義を同時には聞けないので、先生方は声の大きさの同盟を作ってほしいという要求が出る始末でした。

さて明くる昭和二十三年四月学制改革に伴い、新制芦屋高校として発足するわけですが、その発足式の校長の話の一節に、

「われわれは全く新しい高等学校を創造せねばならぬ。そして主として生徒の自発活動による美しい学風と伝統を作るべきである。」

とありました。これは当時の多くの教師達の、新教育への模索の中から自らに湧出し実行されてきた方向だったと思います。

そしてこの方向が最も端的に具現されたのが自治会活動でありました。従来の学校側の組織立てによる校友会活動というのでなく、文化部運動部の大きな枠だけを示し、その中で生徒の同好者が集ってどんなグループを生み出していくかは生徒の自主的な活動にまか征るという基本方針のもとに、文化運動各部の胎動が始まり、自治会組織確立への軌道が敷かれていったわけです。

各部創設期の苦心談は今日では一寸想像し難いような事で、運動部であればまずグランド借用に奔走することに始まり、用具の調達修理、遠征ともなれば部長の心配は何処でどうしてこの部員達に食事をさせるかというようなことでした。それでも徐々に文化運動の各部がその形を整え、昭和二十四年を迎えて自治会新規約の成立と新自治会の発足、秋には始めての一週間連続記念祭の開催、或いは代議員規定文化運動各部規定の成立と、その内容形式は着々と整備されてきました。ある生徒の卒業数年後しての感想に次のようなものがあります。

「われわれの芦高での生活が本当に自由奔放であったうちにも、一つの規範内で行動しそれがまたわれわれの手で定められた。すなわち真に価値ある自治会を創設して芦高を守り発展させようと努力したが、これが現在及び将来とも弱体化することのないよう切に希望します」

こうした創業期のエネルギーは一体何処から来たのか。それはあの戦争によって中断された学問知識への渇仰か、自由な教養趣味への意欲の発現か、又は焦土と化した郷土復興への気持ちであったか、更に物質的貧困さに反比例する意気の見られた時代ではあったと思います。

そして四半世紀を経て現在、我が芦高は「自律自治自由」の綱領をかかげ、自治活動の伝承を生かして進んできました。学校の施設機構も徐々に整備され、自由な校風のもと、生徒諸君が明るくのびのびと高校生活を送っているようです。がその外観とは裏腹に、近年の世相の変転に伴う内面的な混乱と不安、そして無気力化の萌しているところも覆い得ない事実です。

高校生活は学問教養の基礎を築く時期。本当に大切なことは、高校を出た後の生活の中で、自分の専門とするもの或いは自分の教養を自ら学び取っていく力を養うことです。右を見左を見ればいろいろ心迷う事の多い今日この頃ですが、生徒諸君が今一度高校生活の原点を考え、日々の生活に今一層の意欲をもってほしいと思います。教室では学問に対する情熱の瞳を輝かせ、自治会クラブ活動では大いに個性を伸し青春の意気を発散させてほしいものです。

裏表独語

ある春の日ざしがのどかな日、バス停でバスを待っていた。「こんなのどかな日に日の光を楽しまないでどうしてバスの止まりそうな所にみんな群がっているんだろう。もったいない。」と思いながら、バスは少し遅れていた。バスが遠くに見えてきたのでそろそろ列に並んだ。バスは車を避けたため、いつもの場所から少し前で止まった。「早くから待ってたんに！」という声を合図に群がった人達は、入口へと前の人を押し出した。この若い私さえ倒れそうになった。たぶん…、と思うとまもなくおばあさんが倒れてしまった。どうしてみんな早く乗りたいんだろう。乗り物に乗れるだけでも楽なことなのに、こんでいる時にわざわざ座ろうとしなくてもいいのに。みんなで入り口に殺到すればするだけ時間のムダなのに。もっと譲り合う心、やさしい心がないのだろうか。人間の前足は人を押すだけに作られたのではないのに…。

でもやさしい心を持った人もたくさんいる。バスの中で席を譲り合ったり、親切に道を教えてくれたり、お財布のお金が散らばって必死で拾ってくれたり。こんな時、人間ってやっぱりいいなと思う。やさしい心が人間にあれば、一九九九年の七の月が来ようと人間は破滅しないと思う。

私たちも、一日に一度は人に親切にするという習慣をつければよい。親切にしてあげた時の、その人からの"ありがとう"という言葉は、心にしみる。

この一年、何回"ありがとう"という言葉が聞けるか数えてみたい。

▽　▽　▽

新一年生へ

『やる気をもって前進せよ』

生徒課長　朝倉義雄

新入生という言葉のとおりフレッシュな気分で芦高に入学された一年生の皆さん、青年期の前半というかけがえのない大事な時期に当る高校での三年間を、悔のない、有意義なものにするために、やる気を持って勉学に、クラブ活動に励んでほしいと希望します。

現実に高校入試という厳しい一つの関門に当面したとき――人生には何回かそうした関門があります――それまでの中学での三年間を反省し、こういうふうにしておけばよかったと思うことがあったと思います。初心貫徹という言葉がありますが、高校に入学したこの機会に、自分自身の目標をたて、若さと意気をもってつき進んでほしいものです。

芦高の校風は『自由・自治・自律』だとされ、生徒の自主性を尊重していますが、やる気のない無気力な生徒にとっては怠惰の口実になってしまいます。よくいわれてきた高校生の三無主義におちいることなく、何ごとにも積極的にとりくんでみることです。何かに打ちこみ、ベストを尽したという充実感、その中から自分の生甲斐を見いだすことができるでしょう。

高校時代は人生の中でも最良の友を得る時期だといわれます。共に語り、はげみ、互いの人格の成長をもたらすよき友人を得るためにも、ホームルームや自治会のクラブに積極的に参加するのが一番よい方法だと思います。

毎年高校へ入ってきた一年生の感想として中学の先生とちがい高校の先生は親しみにくいといわれます。それは高校の先生が冷淡なのではなくて、高校生は子供ではないので、自主的・自律的に考え、行動することを期待しているからです。もちろん先生方はみな、生徒からの相談や質問には親切に応じ、助言されます。図書館の本も諸君が手にとって読んでくれるのを待っています。45のクラブが諸君の入部を歓迎しています。大勢の上級生・先輩が諸君に眼をそそいでいるのです。要は一年生の皆さんが、やる気を持って一歩前へ出ることです。あらゆる機会を自らつかもうとすることです。引込み思案におちいったり、自分だけの殻に閉じこもったりしてはせっかくの機会も可能性もつかむことはできません。青年らしい活動的な学校生活を自分の手で築き上げて下さい。

本校では、勉学とクラブ活動の両立をモットーとしていますが、これも強い意志と日常の努力によって可能となるものです。やる気のない人には無味乾燥な高校での三年間をいたずらに無意味にすごし、青春に悔いを残すことになるでしょう。やる気のある積極的な人にとっては若いエネルギーをぶつけることにより充実した高校生活をおくり人生の中でふりかえっても最も意義のある時代として回想できるものと信じます。

芦高に人間広場の建設を

現代が希求する憩い・潤い

先代の山本自治会長が（私が山本会長の言葉を引用するのは二度目です。彼の言葉が引用しやすいだけで他に意味はありません。今後も、どしどし引用するつもりです。）「芦高は、まだ三無主義には侵されていない。」と言って卒業されました。私もこの意見に半分程賛成したい。たしかに他の学校に比べると、まだまだしっかりしています。山本会長もそのへんを指して言ったのだと思います。けれども、いにしえの昔に比べると、やはりLoose（長野氏は、流行語を作るつもりなのか第１４７号芦高新聞の第一面でLoose、Looseと叫んでいましたが使いやすいので借用しました。）になって来たようです。

先にも述べたように、このLooseなのは、あくまで学校という社会においてのみで、個人的趣味に対する熱意、情熱は、昔も今も、「すさまじい」という言葉では表わせない程すさまじいものです。

このような個人主義がのさばる根本原因は、山本会長曰く、「心のつながりに欠ける。」ためではないでしょうか。人間の心と心の対話がないからではないでしょうか。その対話の場、それが広場というものです。

ようやく広場というものが出て来ましたが、この広場という概念は、日本人にはあまり縁のないもので、代表的な広場はやはりヨーロッパでしょう。ここでは古代ギリシアを例にとって考えてみましょう。

この広場というものは、人口密度の高い都市のなかで、交通のためでも、住むためでもない、現実主義的な観点からすると、きわめて無意味な存在なのです。けれども、一見むだのように見える広場を、ヨーロッパでは、古代ギリシアから現代まで非常に大切にしてきたように思えます。その代表は、古代ギリシアの「アゴラ」と呼ばれる広場でしょう。

このアゴラには、常時市民が集い、憩い、取り引きをしたり、哲学を論じたりもしたのでしょう。

また都市自身も広場を中心に公共の建物が集まり、市民生活の必須の場を形成していたようです。

このように広場は、その空間的効用以外に、そこの市民の心のつながりを養う共同体精神の土壌であったわけです。

ところが、現代においてこのような広場は、個人主義の増大により、その精神的価値を失いつつあります。広場に集まって心と心をつなごうとする人が少なくなって、広場は単に休憩所的、つまり空間的、物質的な意味しかもたなくなりました。

さて、遠いギリシャから我芦高に目を向けてみましょう。芦屋には、広場というものではないけれども、同じような意味をもつ「ふじだな」があります。

しかし、このふじだなも広場と同じように、少人数の休憩所として利用されることはあっても、見知らぬ者が集まって対話をする場所ではないようです。

数年前に、このふじだなで対話をしよう、という運動をしたグループがあったと記録されていますが、不成功に終わったようです。

それでは、過去において、あれほど人々の間で対話の場として活躍した広場が、なぜ近代になってその地位を追われるようなことになったのでしょうか。

ここで注意しなければならないことは、人間には、広場を見ると対話をしたくなる、という本能はない、ということです。つまり、広場というものの存在が、対話を生むのではなく、あくまでも人間が存在して、その対話の場として広場が手頃であったにすぎない、ということです。

逆に言うならば、広場は、対話の場として適当でなくなり、また、広場に変わる手頃な場所がないために、対話ができなくなり、個人主義が増大したというわけです。

一言でかたづけるなら、時代が変った、ということなのでしょうが、文明が進歩するにつれて、人々の生活が時間に追われるようになり、広場に行けなくなった、つまり広場は時代に取り残された存在になってしまったのです。

広場が時代に取り残されたもの、と言ってしまったのでは、私の主張する「人間広場の建設」ということは、空文に等しくなるのではないか、と思われるかもしれません。

ところが、そうではありません。広場が時代に取り残されたのなら、今までの広場にかわる、新しい、そして時代に取り残されない盤石な広場を建設しなければならないのです。

それが、人間広場です。

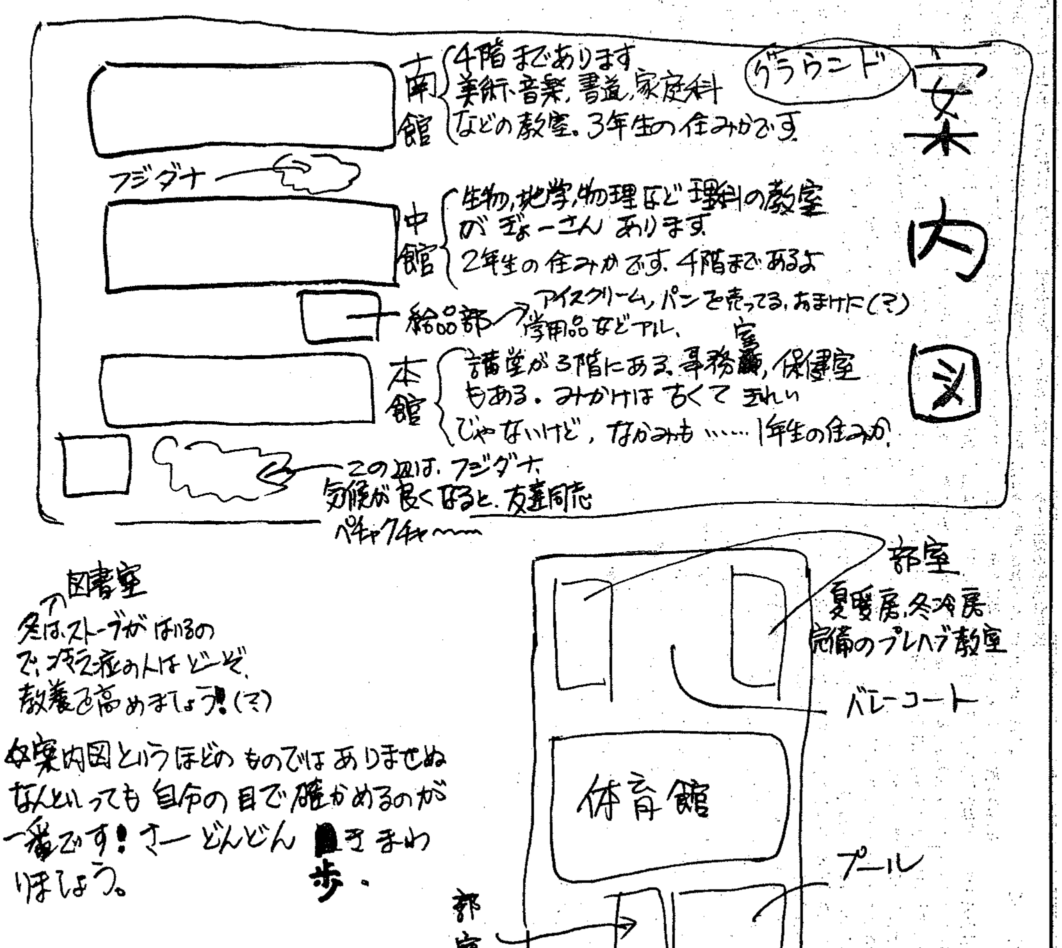
この広場は空間的や物質的なものではありません。対話とは、人間と人間の心を結びつけるものです。どこでも、どんなところでも人々がいるなら、そこが人間広場です。どんな時でもすぐ対話ができます。

そして、人間が生きている限り、決して消えたり、取り残されることのない、永遠の広場なのです。

芦高には、一般社会に比べて、まだまだ人の集まっている所がたくさんあります。H・Rは、ただ単に、授業を受けるためだけの場所ではありません。きわめて有効な対話の場、人間広場にしていきましょう。クラブでは、自己の限界に挑んだり、自己の技能を育て、好みを満足させるためだけでなく、共通の基礎を持つものの対話の場として活用しましょう。

グランドの隅で、ふじだなの下で、教室の中で、どんどん対話を進めて、芦高全体を大きな人間広場にしていきましょう。

そうすれば、Looseや三無主義は消えてしまい、「自治」と「自由」と「情熱」の校風が本当に生かされて、芦高が、すばらしい人間教育の場となっていくのです。


案内図
グラウンド
南館
4階まであります
美術、音楽、書道、家庭科
などの教室。3年生の住みかです
フジダナ
中館
生物、地学、物理など理科の教室
がぎょーさんあります
2年生の住みかです。4階まであるよ
給品部
アイスクリーム、パンを売ってる。おまけに(?)
学用品などアル、
本館
講堂が3階にある。事務室、保健室
もある。みかけは古くてきれい
じゃないけど、なかみも……1年生の住みか
この辺は、フジダナ、
気候が良くなると、友達同志
ペチャクチャ～～
図書室
冬はストーブがはいるの
で、冷え症の人はどーぞ。
教養を高めましょう!(?)
部室
夏暖房、冬冷房
完備のプレハブ教室
バレーコート
体育館
プール
部室
案内図というほどのものではありませぬ
なんといっても自分の目で確かめるのが
一番です！さーどんどん歩きまわ
りましょう。